

## 蔵王山有情

日本山岳会 No.7734 木村 喜代志

蔵王山は遠望する限り一塊の盛上がった山並みで、悠揚せまる姿をしている。アルパインムード漂う急峻さはなく、全体としてなだらかな稜線、ゆったりとした山肌で見る人、登る人を包み込む東北特有の山である。

蔵王の古い呼び名は刈田嶺(加々野)であり、不忘山(ワスレズヤマ)であつたらしい。蔵王山の最高峰、熊野岳山頂に石垣に囲まれて熊野神社が鎮座し、蔵王権現が祀られている。これが山名の由来となっているので蔵王連峰に「蔵王山」は存在しない。

蔵王権現は、修験道の祖と仰がれている役小角(エソノカウ)が金峰山で修行中に感得した悪魔降伏の菩薩とされている。蔵王山はもともと修験道で開かれた山であった。その名残をドッコ沼の独鈷(金剛杵一煩惱を破碎する密教の武器)、ザンゲ(懺悔)坂、地蔵山、坊平などの地名に留めている。

今日の蔵王は、スキー場として全国に知れ渡っている。山形・宮城県境に横たわる広い蔵王連峰は、新旧火山のたおやかな地形を巧く利用してスキーコースが山形、宮城の両県側に開かれている。冬の蔵王の魅力は、何ととっても樹氷と、乾燥した粉雪のなかでのスキーである。

雪が落ち着いた頃、晴れた日のスキーツアーは文句なく楽しい。山々が白一色になるとより大きく、広く感じられる。それに山肌はこの世のものならぬおびただしい雪の造形、雪の坊すなわち樹氷に飾られる。日夜おびただしい過冷却水滴と雪粒の攻撃に身をゆだねるオオシラビソは、頭から根元まで真っ白に凍りついてしまう。中でも地蔵山西斜面は季節風通過の中心で、ことのほか見事な樹氷群が発達する。樹氷群の中に入ると、硬い白色、柔らかな白色とでも言うのだろうか、白一色のなかにも色があることに気付く。毎年、地蔵山山頂から蔵王沢を左手に見ながら樹氷の中を滑っている。数年前、同行者の口から「これが蔵王だ!!」の言葉がぼろりと漏れたことがあった。

3月末、春風が頬を撫でる頃、好天に誘われて火口湖、お釜にスキーで降りた。凍ったお釜の真ん中から見上げる世界は、異様な色彩と造形で心の落ち着きを失わせる迫力だった。五色岳の崩落はひっきりなしに続いていた。蔵王は宮城県側に噴気孔をもつ活火山である。ここお釜も1939年に活動し、湖水を濁らせ、泡立った。もし、火山活動でも起これば…の不安がないわけでもなかった。お釜は自然への怖れと敬意を抱かせてくれるところだった。

山の木々が芽吹き、葉の成長につれて変化する緑は、みどり一言で片付けられない色調に富んでいる。そして、山肌には色とりどりの花が咲き、短い夏を彩る。コマクサは夏の蔵王を代表する花である。殺風景な砂礫地に咲く可憐なピンクの花を、誰が言ったのか「高山植物の女王」の名もある。女王のイメージとは裏腹に、何も育たない荒地に最初に根付き、土地の養分が豊かになるとその場所を他の植物に譲り、別の場所へと移動する過酷な運命を背負っている。孤高な女王の生き方を地で行く花である。

コマクサは、高校の校章になっていた。絵が得意で、何時も障子紙、墨汁と筆を持って山

に入っていた G 先輩のデザインに、美術の先生が手を加えられたと聞いた。先生によると、最初は、県の花になっているベニバナで大方の賛同を得ていたが、漢方薬として婦人病に効用あることを知り、これをシンボルとすることはできないと、半ば強引にコマクサに変更したと語られていた。

高校山岳部の伝統行事の一つに、「山開き」と「山閉じ」があった。この時だけは、山岳部 OB さんの経営する蔵王温泉旅館の T 屋さんに泊れた。数人の OB さんも参加してくれる行事で、山岳部の心得に始まり、山行の反省そして来るべき冬山、春山に向けて気を引き締める行事であった。

高 3 の山閉じに NC と SY と土曜日に学校を休んで、山越えして T 屋さんに向かうことにした。新雪が夏路を覆っていたので白いところを進んだ。高度が増すにつれて白い部分が広がり、いつの間にかコースを大きく逸れていた。夕闇が迫る頃、足跡を見つけてほっと一息ついたのもつかの間、今しがた自分たちが歩いた足跡だった。言葉では知っていたリングワンドリング、輪形彷徨だった。キツネにつままれたような、実に不思議な気持ちになった。もうこれ以上の行動は無理と判断し、ビバークを決めた。体を寄せ合い、うとうとし始めた時だった。人の声が聞えた。幻聴?!と疑ったが、暗闇の中にヘッドランプが近づいてきた。山閉じに駆けつけてくれていた OB さん 3 名が搜索に来てくれたのだった。

翌日、親も一緒に校長室で嚴重注意を受けたことは言うまでもない。親には散財させ、世間を騒がせたのだから、家に帰れば一喝を覚悟していた。翌日、3 人とも「今後、気をつけるように!」の一言だけだったことに顔を見合わせた。卒業近くになって、その訳を知った。神妙な顔で校長室にいた時、親たちと一緒に山岳部の大先輩、後藤幹次氏が同席してくれていた。江戸初期から続く家系で、参勤交代時の本陣だった旅館の旦那さんである。「嚴重注意で十分に反省しているから、家では怒らないで欲しい」と、3 人の親にお願いしてくれていたのだった。あれから半世紀余、大先輩も、NC も、SY もこの世を去ってしまった。

蔵王を主なフィールドとして半世紀を越えた。特に、山岳部 OB さん方々の尽力で 1959 に「こぶしの小舎」が蔵王の山懐に建ったこともあり、若いときに年間の相当日数を蔵王で過ごすことができた。学生生活の最後に遊んだのが、熊野岳に突き上げる蔵王沢の源頭に構えるワシ岩だった。夏に SM と登ったときは、ホールドの岩がパカッと剥れ酷い目であった所である。

ブナ林の中に建つ「こぶしの小舎」の背後に三宝荒神山が聳え、懐にローソク岩、別称夫婦岩がによきと立っている。パラダイスグレンデからの格好のカメラアングルで、蔵王を象徴する風景の一つとなっている。2月の晴れた日、後日パンジャブヒマラヤ行を一緒にした OT と登りに出かけた。二つの岩塔を真下から見上げるとかなりの高さであったが、氷の詰まった岩塔間を通過して脇に立つと身の丈 3 つほどであった。脆そうな岩だったが、凍結が幸しさほどの苦勞することもなくザイルを伸ばすことができた。妙にすっきりした気分でこぶしの小舎に戻ったのを覚えている。

お釜の背後、裏蔵王で遊んだ帰り日没が迫っていた。もう、スキーヤーの姿はないザンゲ坂にさしかかった時だった。雪の坊、樹氷が夕焼けに染まった。滑るのを止め、黙って見入

った。しばしの沈黙の後、「見た?」、「見た!」の短い会話を交わした。

数々の山行のベースになった「こぶしの小舎」は1999年、老朽化にともない40年の幕を閉じた。小舎への小路も敷地もやぶに埋もれてしまった。しかし、小舎が育んでくれた思い出は、小舎跡の四隅に植えられたコブシの若木の成長とともに永久に尽きることなく浄化され続けている。

高校時に蔵王で覚えた山登りとスキーの面白みは、後にアルプスのオートルート、カナダ・ワプタ氷原横断、チベット・カンリガルポ山群スキー登山、パタゴニアトレッキング、知床半島縦断、大朝日岳スキー登山など行動範囲を広めてくれた。そして、今でもスキーシーズン初めは、蔵王でのトレーニングが始まる。

50余年の間には、蔵王の変貌は大きい。上ノ台ゲレンデから南へ広がり横倉、大森そして黒姫ゲレンデと拡張されてきた。ゲレンデには外国語が飛び交い、道標には外国語を目にするようになった。同時にスキーヤー激減の波は、樹氷、温泉そして雪質などスキー場としての条件の揃った蔵王にも押寄せている。リフト撤去、運転休止、宿泊施設閉鎖などを耳にするようになった。ここまで滑れるようになったのも蔵王のお蔭だけに何とも複雑な思いである。

(2011.2020 加筆)